

生・老・死 人生観の比較文化論

De la naissance à la vieillesse et jusqu'à la mort—
la vie humaine dans une perspective comparative

ジョセフ・A・キブルツ

【論文要旨】

明治維新によって突き動かされた認識論的革命がどれほど日本人の人生を支えていた概念を変えたか、それ以来人生をどのようにいき、人生のもろもろのステップをどの様に今日認識するか？

戦後に一般化した一つの概念的変化は出産以前の期間に関係する。西洋医学の科学的観念を無条件に取り入れて以来、子供の個性は誕生とともに肯定され、妊娠期間を計算することはなくなった。このようにして、人は昔の様に正月ではなく、今日では誕生日に歳をとることになった。

産婦人科が発達すると、女性が科学の対象となり、出産は母親が属する社会的環境から切り離された病院という中性的空間で行われるようになった。今、新生児は出生地の役所に名前を登録して、社会的身分を獲得するが、前は新生児を故郷の氏神に紹介することで社会化が行われていた。

昔は同族や家族のなかに完全にくまこまれて生活していたが、現在ではしばしば距離的にも愛情的にも、老いた両親は子供たちから切り離されている。子供たちは親の世話を養老院にや老人施設に依頼する。老人たちは老人病学の対象として余生を送るのである。このように、老人たちはもう自分の家で近親者の中ではなく、病院という公共的施設のなかで死を迎えるのである。

最近では肉体そのものが、対象化と疎外から脅威を受けている。なぜならば、西洋の国々が日常行っている強要された死や移植、臓器の売買や提供が日本ではまだためらいがちであるにもかかわらず、近い将来には西洋同様実地されるであろう。世論は臨床死をすべての客観的最期と承認することを躊躇している。脳死に関する問題についての論争が証拠である。

そうした変化はどのような認識過程に基づいているのだろうか。ここに比較文化論的の立場から考察したい。

キーワード：認識論、日本文化論、人生の対象化、個別化、身体の対象化